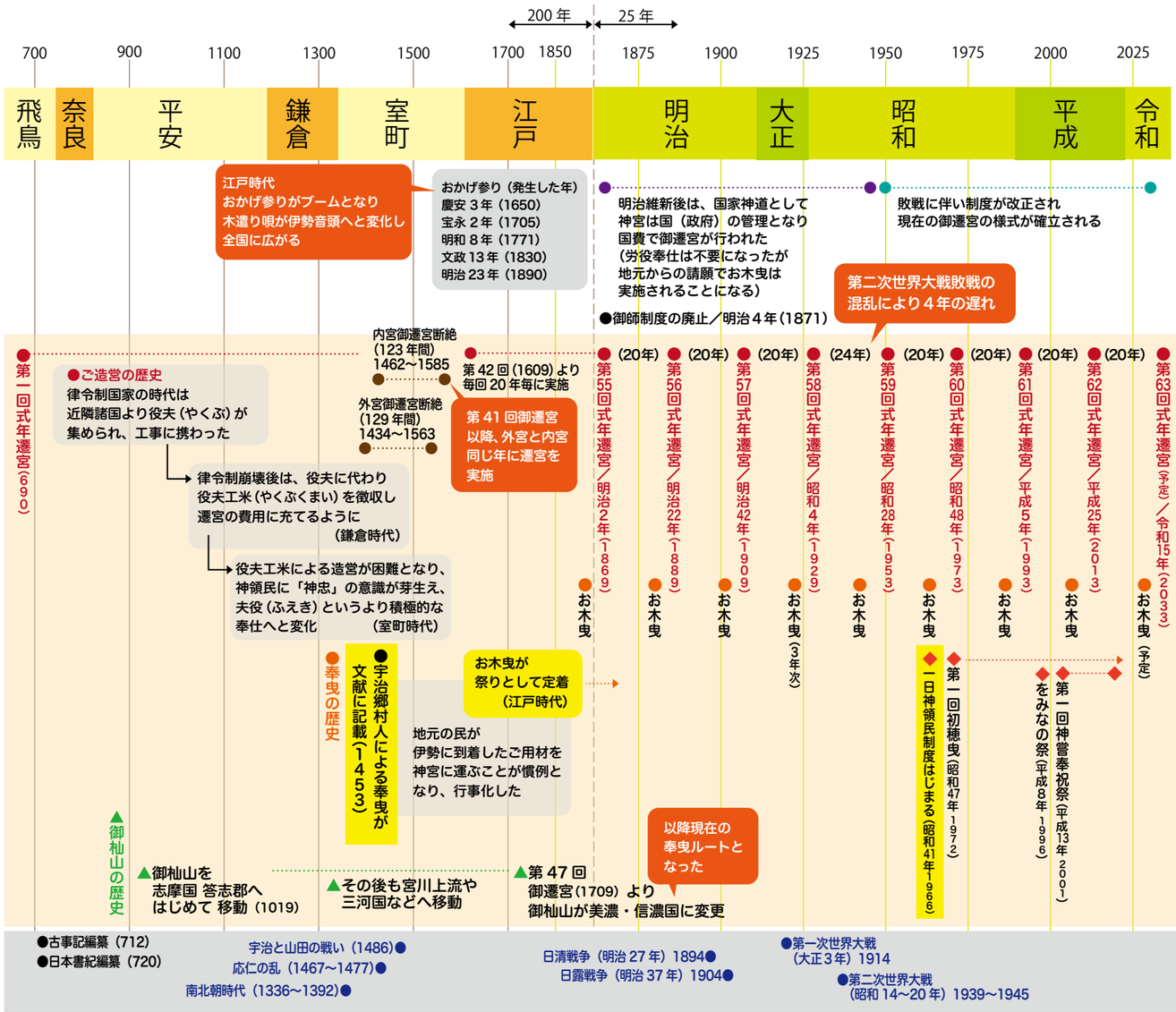
遷宮と伊勢の民俗行事 お木曳の変遷　年表

年表の見方／江戸時代以前（約1200年）の目盛りは200年刻み、明治以降（150年）の目盛りは25年刻みとして、明治維新頃を表の中央に配置

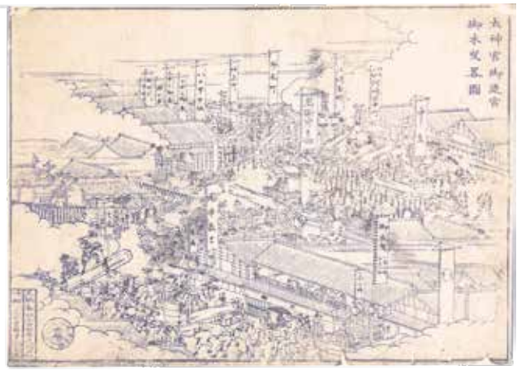


日本の歴史の中にみる神宮と共にある伊勢の民

神武天皇からはじまり126代の新天皇陛下に続く国の歴史。現代まで続けられてきた神宮の御遷宮、第一回は690年持統天皇の御代であったとされています。701年には大宝律令が完成し律令国家へ…そんな時代です。律令制度の下では国の直轄でご造営のための役夫が集められていましたが、10世紀以後は全国からご造営資金といえる「役夫工米」が集められ御遷宮が実施されました。そんな中で地元では神領民として労役でご奉仕にあたることとなり、それが慣例となったのが「お木曳」「お白石持」のはじまりです。

戦国の世に御遷宮が中断したこともありましたが江戸時代には20年毎の式年遷宮が定着していき、それから約400年間、平成25年の御遷宮は第62回としてその歴史がつながれました。

こうして年表の上でたどってみると、御遷宮同様、民俗行事としても「20年前を踏襲」するだけではないことはあきらかで、様々な時代背景に知恵や力をあわせながら伝統を継承されてきた先達の苦労が感じられます。


「大神宮御造宮御木曳図」（伊勢市所蔵　宇治山田市史資料図版より）

伊勢の伝統文化を伝える

昔の一枚

伊勢の民俗行事 お木曳（ひき）

500年以上の歴史がある伝統行事「お木曳」。神宮にご用材を運び入れる労役を起源とする伊勢ならではの特別な民俗行事です。

大湊奉曳団の陸曳（大正時代）

五十鈴川の河原から神域内へとご用材を運ぶ川曳（大正時代）

大正のお木曳　川曳・陸曳

神宮へのご奉仕として、500年以上前から継続されている「お木曳」。お宮のご造営に使用するご用材をそり（川曳）や奉曳車（陸曳）に載せて曳き運びます。明治以降は実質的な労役奉仕ではなく、神宮とともに生きる伊勢の旧神領民の奉仕の心を伝える「遷宮に伴う民俗行事」として継承されています。

明治〜昭和（戦前）の時代、ご用材は木曽の御杣山（みそまやま＝ご用材のために決められた山のこと）から伐り出され、木曽川を下り桑名へ、そして伊勢湾海上を渡り、伊勢大湊の貯木場に搬入されました。ここで両宮の用材が分けられ、内宮のご用材は五十鈴川を、外宮のご用材は宮川を遡り、それぞれの神宮工作所まで運ばれました。お木曳の川曳、陸曳それぞれの奉曳コースはそんな歴史の名残をとどめています。

大湊町の人たちは大切な木を預かるという重要な役割の歴史があり、現在でも内宮領・川曳、外宮領・陸曳の両方でお木曳を行う唯一の地域。特別なご用材である内宮棟持柱を載せる大きな奉曳車を持つ伝統ある奉曳団です。戦後、陸路運送となり貯木場は埋め立てられてしまいましたが、今も大湊貯木場跡には記念の石碑が建てられています。